

2022年9月4日 礼拝説教要旨

詩編講解説教120「平和を語る民」

詩編120：1～7、エフェソ2：14～18

詩編第120編から134編までの15編に「都に上る歌」という表題が付いておりまして、これは一つのまとまった詩集であると考えられています。「都に上る」というのは、エルサレムの都に上ること、いわゆる巡礼のことを指しているかと理解してよいでしょう。口語訳聖書では「都もうでの歌」と訳しています。ユダヤ人は律法の規定に従い祭の時にエルサレム神殿に詣でていく慣習がありました。ルカ福音書2章には主イエスが毎年過越祭の時に家族でエルサレムに巡礼の旅をした話が出てきます。イスラムや仏教にも巡礼がありますが、宗教学的には日常を離れて聖なるものに近づく行為を「巡礼」と言います。

モーセの十戒では安息日規定があります。「安息日を心に留め、これを聖別せよ」（出エジプト20：8）わたしたちの日常もそういう聖なる日に向かって進みます。そうすると週日の生活はそれこそ巡礼の旅そのものと理解することができるでしょう。わたしたちはこの聖なる安息を求めて旅する巡礼の旅人なのです。第120編には「平和」（シャローム）という言葉が繰り返されますが、この「平和」が都に上る歌の一つのキーワードになります。122：6～、125：5、128：6等。平和（シャローム）は単に戦争がないことを意味する言葉ではありません。ヘブライ語においては「完全」や「充足」を意味します。健全で命が満たされた状態です。日曜日に礼拝に集まるとき、そこでこそわたしたちは満たされ、本来のあるべき姿を取り戻すことができる。それが平和です。

もし、この平和を得ることができず、自分を取り戻せないままであったならばわたしたちはどうなってしまうでしょう。今、様々な理由で礼拝に集うことが困難になることがあります。コロナもその要因の一つになりました。それだけではありません。以前から仕事や学校行事などで礼拝に集うことが難しくなることがあります。また病気を患って、年老いて、礼拝に集うのが困難になる。そういう場合が人生の中では必ずあります。それは一時的なことかもしれませんが、しかしそれが常態化するのはいやほやほやなことではありません。そこでは自分が満たされないままなのです。それが長く続けば、わたしたちの魂は枯渇し、やがて死んでしまうでしょう。今日のところには「魂」という言葉が繰り返されます。「主よ、わたしの魂を助け出してください」（2節）。礼拝に集うことができず、魂が悲鳴をあげていることを見逃してはいけません。

第120編は、何よりその魂の悲鳴が訴えられています。この世の巡礼の旅路の困難さ、神さまのもとにたどり着くまでの困難が歌われているのです。わたしたちにしてみれば、この世の生活がまさにそれです。「主よ、わたしの魂を助け出してください。偽って語る唇から、欺いて語る舌から」（2節）まさにこの世は偽り、欺瞞に満ちているでしょう。偽預言者が横行しています。統一教会の問題が世間を賑わせていますが、それで苦しむ人々が大勢いることを改めて知らされます。「偽って語る唇」で思うのは、そういう詐欺が多いということです。オレオレ詐欺やインターネットでのフィッシング詐欺。メールを開くと国税局から未納があるというメールが届く。そういう通知がメールでくるはずがないのに、それだけでドキッとしてしまう。いかに世の中が嘘、偽りに満ちているか。

そういう世の中を生きる不幸をこの詩人も経験しています。「わたしは不幸なことだ。メシエクに宿り、ケダルの天幕の傍に住むとは。平和を憎む者と共に、わたしの魂が久しくそこに住むとは」(5～6節)「メシエク」「ケダル」というのは、場所を特定するのは難しいのですが、一般的にはエルサレムから遠い僻地を表す用語と理解してよいと思います。具体的には捕囚の民として遠い地に離散していったイスラエルの民がその地で故郷を思い嘆く様子です。散らされたところに寄留する。それがいかに肩身の狭い、不自由な生活であるか。寄留の民というのはそういうものでしょう。捕囚のことを考えれば、周りは好戦的な人々ばかりで居場所がない。わたしたちもそういう思いをすることがないでしょうか。立場の違う人たちの中で一人孤立するような、孤軍奮闘するような経験はないでしょうか。周囲がみんな敵のように感じてしまう経験。この世を生きるというのは、まさしくそういうことです。「平和を憎む者と共にそこに住む」ということなのです。もしそこで自分が満たされないままにいることは本当に不幸なことです。

しかし、この詩人はそのような環境の中でも平和を語ると言います。「平和をこそわたしは語る」(7節)この訳には平和への強い憧れ、そこに希望を見出そうとする強い思いを感じます。敵意の中で、偽りと欺瞞の渦巻く中で、それでもわたしは平和を語る。それが他でもないわたしたちキリスト者であり、そういう場所が教会であり、そこでわたしたちは自分を解放し、自由になって、自分を取り戻していくのです。わたしたちはキリストの救いに満たされ、神さまとの平和をもってこの世に存在するのです。

それは平和の主であるイエス・キリストをかしらとする時に可能です。「実に、キリストはわたしたちの平和であります」(エフェソ2:14)キリストは、ご自身が神の子であられるのに、この罪深い世に来られました。平和の使者として、わざわざこの敵地のようなところにその身を置かれた。それはわたしたちと同じ寄留の民になってくださったということです。平和を憎み、戦いを語る世界に共に住んでくださったのです。このキリストと共にわたしたちもこの世で寄留者として平和を作り出していくことができます。

「平和を語る」というのはもっと動的なことです。出エジプト記に「あなたたちは寄留者を虐げてはならない。あなたたちは寄留者の気持ちを知っている。あなたたちは、エジプトの国で寄留者であったからである」(23:9)とあります。好戦的な世界で孤立し苦しむ者たちがいます。居場所のない人たちがいます。そういう人を支える。ペトロの手紙に次のようにあります。「愛する人たち、あなたがたに勧めます。いわば旅人であり、仮住まいの身なのですから、魂に戦いを挑む肉の欲を避けなさい。また、異教徒の間で立派に生活しなさい。そうすれば、彼らはあなたがたを悪人呼ばわりしてはいても、あなたがたの立派な行いをよく見て、訪れの日に神をあがめるようになります」(Iペトロ2:11～12)これが平和を語る者の生き方です。